

43 ベレッツァーニ解剖図譜における

自律神経系

レジス・オルリー・¹⁾○本宮かをる²⁾

十七世紀初頭、ピエトロ・ベレッツァーニ (Pietro Berreini, 一五九六—一六六九) はおそらく二七枚の解剖図譜を、プレートIとIVにモノグラムを判読できるルカ・チャンベルラーモ (Luca Chamberlano) に彫版させている。これらのプレートは、十八世紀半ばまで出版されることなく眠っていたが、カエターノ・ペトリオリ (Cajetano Petrioli) によって一七四一年に出版され、一七八八年にフランシスコ・ペトラグリア (Franciscus Petraglia) が最終版となった第二版を出版した。

もともとベレッツァーニの解剖図譜を挿し絵とするはずであった文章は、発見されていない。したがって、著者の解剖学的知見の状況は、図譜の詳細な分析によって示されるのみである。

この研究の目的は、ベレッツァーニの解剖図譜における自律神経系の知識について詳説し、当時の他の解剖学者の解説と比較しようとするものである。

十七世紀初頭、自律神経系に関する知識は充分ではなかった。交感神経幹は誤って肋間神経と呼ばれており、ほとんどの神経節の結合部は知られていなかった。実際のところ自律神経系の発見は、数十年後の一六八五年のレイモンド・ビュソン (Raymond Vieussen) と一七三二年のヤコブ・B・ウインスロウ (Jacques Béigne Winslow) のおのおの著名な業績によって始まった。

概括して自律神経の構造はベレッツァーニの解剖図譜の中のVからXIIIまでのプレートに描写されている。

「肋間神経」と呼ばれたもの(現・交感神経幹)が胸部に明確に示されているが、胸部神経節は見逃されており、何ら記載がない。他方で、腰仙骨神経幹には、神経節組織を構成すると思われる多数の突起部が示されている。左右の仙骨神経幹は、矢状断面で接合しており、尾椎骨交感神経節が明らかにこの接合点に見て取れる。

プレートXIIIには交感神経幹の頸部の一部分が示されて

おり、おそらく上位と中央の頸部交感神経節の両者であろうと思われるふたつの頸部神経節がみられる。

プレートVIII—XIでは、いくつかの内臓神経の出どころは胃、腎臓、副腎、肝臓、胆嚢に辿ることができ、それらはしばしば迷走神経から起っている神経枝と混合している。

両迷走神経の副交感神経繊維は多くのプレートに描かれており、それらの胸部分布は気管支枝に限られるが、左と右の再分岐とも、おそらくプレートVとVIでそれぞれ認識される。驚いたことに左右の迷走神経は、食道の胸部の前で互いに何度も吻合している。腹腔内では、右迷走神経が消化管の後ろを通っているにもかかわらず、左迷走神経はその前面に位置しており、後者は上部結腸間膜領域の総ての主な臓器へいたる神経枝総ての源となっている。

最後に、この時代には普通、描かれたであろうはずの頭蓋副交感神経系の構成要素がどのプレートにも見えない。

結論として、ベレッティーニの解剖図譜における自律

神経系は、ヒトの解剖体から描き起こされたものと見えるが、同時にこの時代の解剖学的知識に示唆されたようでもある。多くの交感神経・副交感神経が緻密に描かれているが、いくつかの細部は、解剖学的所見にも当時の解剖学的知識にも適合しないため、不可解である。このことは多くの研究において、ベレッティーニの優れた解剖図譜を挿画として解説した、神経学ないしは神経解剖学の教本の、著者の鑑定を困難にしているといえるだろう。

- (1) ケベック州立大学トロワリヴィエール校
- (2) 東京大学教養学部総合文化研究所